

「徳島に来る留学生の度重なる災難！」

——とくしま異文化キャラバン隊二〇一七——

げーるっ

み すみ とも こ

Gehrtz-三隅友子（徳島大学教授）

はじめに

今この稿を目にしてくださいとある皆様に質問です。もし、(もしです)今あなたが、二〇歳くらいで外国のある地方都市に到着、すぐに「お祭りの人出が足りないので助けに来てほしい！」と頼まれたらどうしますか？この国を何でも見て聞いて感じてやろうという思いで、「行きます！」と、その国のことは応えますか？

想像を絶する過酷な祭り

来日後すべの九月末の金曜日、生活と講義履修のオリエンテーションの際に、先ほどの問いかけが徳島大学の交換留学生(一年の予定)に投げかけられました。この祭りは、徳島県の南部、(四国の右下部の太平洋側にある)美波町の日和佐地区で江戸時代から続く豊漁豊作を祝う八幡神社氏子の祭です。二〇一七年は十月七、八日の土日の二日に渡って行われました。七日、徳島市内からバスで約一時間半、宿泊先の海沿いのホテル「白い燈台」に到着、参加者全員総勢五〇名で写真を撮ったあと、海岸近くに移動し、助っ人である町(本町と西新町)に配属されます。日和佐地区の八つの町(戎町・西新町・桜町・東

町・本町・中村町・奥河町・恵比須浜)が各町「ちょうさ」と呼ばれる太鼓屋台を持っていて、これを担いで一日目は町廻りをします。現在は担ぐ部分の下に車があるのですが、一九五〇年ころ(昭和二〇年代半ば)には人の力で担いでいたと聞きました。とはいっても二トン近くのちょうさと半日歩くことになり、背の高い学生が肩の痛さを避けるために中腰になると今度は腰に痛みが来て、半泣きの顔も見られます。この一日目で担ぎ方のコツを学びつつ、地域の人たちとおぢやさん(各町の女性を中心となって料理や飲み物の用意をする女性組織)の接待を受けながら、休憩地点で共に飲んで食べてつながりを作ります。

夜になり、海の見える露天風呂に入り、和懐石の食事等、来日後初めての体験が続きます。箸を使って初の生魚に挑戦したり、成人してからでは裸体をさらしたことがない者も日本人学生に教わりながら、銭湯マナーを知ったりすることが続きます。

この祭りの夜のイベントは宵宮への参加です。真っ暗な中に提灯がゆらめく神社の境内にて奉納の舞や子供の相撲や三番叟(幸せを祈願する人形の舞)といった演芸を見なが

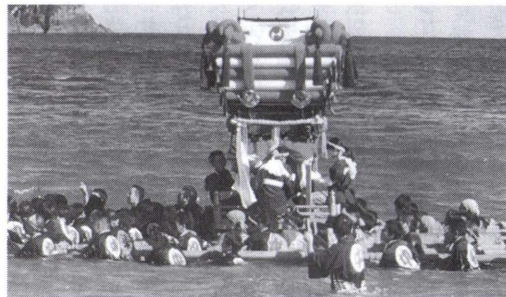
ら、幻想的な日本を味わったあと、神社と大浜海岸の間に打ち上げられる奉納花火を楽しまます。周辺で星の降るような花火の美しさと音に留学生らはますます興奮状態になります。冷めやらぬままに、午後十時には、同室の高校生や様々な国からの留学生と明日に備えて緊張しつつ疲れて眠りに入ります。

八日の日曜日はいよいよ本祭り、「お浜出(神社から海岸まで繰り出す)」と「お入里(神社へと戻る)」となります。十時開始、神社を取り囲むように並んだ、それぞれのちょうさの前で、宮司からのお祓いの後、御神輿に続いて八つのちょうさは「お浜出」に向かいます。年によって町の順番が決まっていますが、留学生が手伝う町は一番目と八番目でした。この日は、太鼓屋台の下の子が取り払われ、五〇人近くの肩にかつがれて、順序良く出発、まず境内を練り廻り、お浜出、金の神輿と八つのちょうさが海岸に並ぶ姿は壮観です。そして再び神社に戻る「お入里」まで、男たちとちょうさと海の闘いが繰り広げられます。

二〇一七年は天候に恵まれ、明るい日差しと少し汗ばむくらいの気温で担ぎ手にとつては最高の状態でした。年によっては小雨の降る肌寒い年もあれば、台風が来てお浜出が中止になることもありました。ここでの試練は、ちょうさが毎年同じルートをとどつたり同じようには動かないということです。まさに人が操る生き物です。というのは、目の前の海岸に一体いつ入るのかは、誰にもわからないのです。浜辺の定位置にたどり着く前にいきなり海へ入ったり、帰りに入ると思われていたのが、担ぎ手のバランス等の判断で入

らなかったり、
本場にドラマ
があります。

また波におお
られて、沖へ
と流されそう
になって、浜
辺から綱を
使って総出で
手繰り寄せた
りすること
も。いかだの
ように組まれ
た担ぎ棒から
外れて、沖に
流されそうになった担ぎ手もいます。浮き輪
が投げられ命がけでつかまって戻ってくるこ
ともあります。はいている靴が流されていく
ことも。見ている限りでは過酷としか言いよ
うがありません。



お浜出

そもそもこの海岸はアカウミガメが産卵す
ることで有名な遊泳禁止の場所です。という
のは砂浜の部分は少なく急に深くなっている
のが特徴だそうで、その意味でも泳ぐことが
禁じられています。この祭りのクライマックス
は、やはりこの浜辺での八つの町のちよう
さと海が作る動きと言えます。ちようさを担
ぐ全員が息を合わせることで、動きのとれない
海の中で、自分の命を守ること、この苦難を
乗り越えて町同士が競い合って海と闘うドラ
マを繰り広げます。

何年前には、まさか海に入るとは思いも
しなかった留学生（伝えてあったはずなので
すが）が海に入る寸前に、財布と携帯が危な

いーやばい！ことに気が付いて、わー！と叫
びながら浜辺に投げ捨てたことがあります。
た。そこはすぐに、見守る女子学生がキャッ
チして預かることに。それ以来担ぐ男子は女
子に貴重品を委ねる方法を探ることになりま
した。

またある年には、ラオス、モンゴル、ブル
キナフアンからの学生が感動したことを伝え
てくれました。この三つの国には共通点があ
ります。そうです、彼らの母国は海が無いの
です。まさか、祭りで海に入るとは思わず、
海水が塩辛いというのを初体験し、本当に驚
いたとのことで、おそらく信じないだろう自
国の家族や友達へ、画像と共に自慢したと聞
いています。

全身びしょびしょになりながら順番に神社
へと帰る「お入り」も、すんなりちようさの
格納場所の太鼓納屋に納まるものではありません。
太鼓若連中（ちようさの運行管理の責
任者）の指揮の下、納得いく担ぎができるま
で何度も、奉納の動きを繰り返します。

祭りを支える音魂

ちようさは五層のふとんの下に、太鼓と四
人の打ち子が乗り込み、町ごとに違うリズム
を、担ぎ手が動くと同時に叩き始めます。担
ぎ手と共に海に入り、叩き続けるこれもまた
過酷な試練ともいえるでしょう。

掛け声は、次の三つ、まず「イッサンジャ
イ」意味は「勇んで行くぞ」で、一般的に使
う掛け声です。そして、太鼓が早く打ち鳴ら
され、ちようさを高く上げるときの「サー
サーサー」とその後の「ヨイヤーサッ
サ」の男たちの声が響き渡ります。お祭りが

終わってからも、参加した男性は太鼓の音と
「サーサーサー」が身体に染み渡ってい
るようです。祭りのあと、大学内で何か困難
なことに取り組むときに、冗談で一人が
「サーサーサー」と言い出すとみなが合
わせるといったこともあります。状況から
生まれた共通言語となったかのようです。

宮司の話によると、太鼓の音には罪や穢れ
を取り除く力があるとのこと、お祭りに参加
しこの音魂のシャワーを浴びる効用もあるの
かもしれません。留学生らがいだく様な不安
を打ち消すようなパワーがあるのでしょう。
祭りの後の彼らの表情は確かにすっきりし
ています。

彼らは西新町のちようさがお入りを済ませ
ると、ホテルのお風呂で海水と砂を落とし、
女性たちと合流して、八番目の町が最後にお
ひらきをする前にこの地を去りました。二日
間の緊張と疲労から、徳島市内にある大学へ
と向かうバスの中では全員見事に眠り込みま
す。



西新町

男性は何をしたらよいかがはっきり分かるこの祭りですが、まさか男性だけを連れて行くわけにはいかないと考えました。当初問題となったのは、ちようさを担ぐことができない女子がどのように一日目の祭に関わるかです。そこで二年目からは日和佐中学の生徒と地域住民がグループに分かれ、町を歩き回り、日和佐の魅力を伝える写真をそれぞれが選び、日本語・英語・中国語のキャプションを付けてフォトブックを、三年目にはフォトマップの作成にいたしました。

女性は自由に街を見て廻れることを活用したわけです。出来上がったマップには、四国遍路二三番札所薬王寺からと、日和佐城からの二つの方向からの町を俯瞰した景色、漁師町らしい「あわえ(あわい)・・・車の通れないような狭い路地の総称」と古民家やお寺が選ばれています。この地域に住んでいる人にとっては当たり前のものが、留学生や都会の高校生にとってはとても珍しいものであることも地域の方々にはわかっていただけたようです。

二日目は、お当やさんのお手伝いで、担ぎ手の休憩に合わせ、飲み物や食べ物を笑顔でサーブしながら、男性たちをねぎらいます。ここでの女性たちの感想は、祭りの中でちよささを担ぐ男性たちがいつも以上に魅力的になる！（素敵な男性はより素敵に、そうでない男性もそれ以上に逞しく見えるという事です。祭りと女性の位置づけはいろいろとありますが、この祭りでは、女性も積極的にお祭りに参加し、町全体で運営しているという意識が、後世に伝わる大切なものとする

八つの町の中で、子供、若者、壮年期、古老そして女性の働きという役割を分担し、町ぐるみで祭りを運営するという、地域のつながる力と組織の在り方を確認することができました。

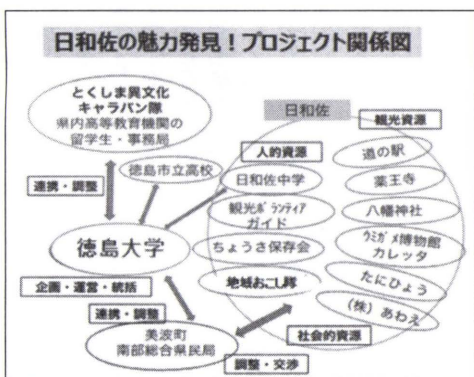
すでにこの祭りには二〇一七年で五回目の参加になります。既に二四か国、のべ二五〇人が参加しました。

一時は全町そろっての開催が危ぶまれた祭りですが今も実施が可能となっているのは、祭りを支援する「ちようさ保存会」をはじめとする様々な組織の努力のたまものと言えるでしょう。担ぎ手を広く募集することに加え、祭りを被写体とするフォトコンテストを実施し、選ばれた写真を使ったカレンダーの作成も功を奏しています。特に二〇一七年の十一月のカレンダーには、キャラバン隊の女子留学生四名が祭りを楽しんでいる写真が採用されました。この時、ようやく女子留学生参加の意味付けがなされたように思いました。こうして国際交流を含め、多くの人の参加を目指した開かれた祭りとしての知名度も上がりました。そしてこの年第二回ふるさとイベント大賞（一般財団法人地域活性化センター）の「ふるさとキラリ大賞」を受賞することになったのです。受賞理由に外国人参加を積極的に促し、新たな地域活性化の姿を提示したことが挙げられています。これも成果と言えるのではないのでしょうか。

また今年で六年目を迎える今を振り返ると、受け入れ側の戸惑いが年を重ねるごとに変わってきているのも実感しています。例えば

ば、最初はイスラムの学生の食事に關して、事細かにお願ひをしていたのですが、「今回はイスラムの方は何名いらっしやいますか?」「他の宗教や文化で氣を付けることがあればお知らせください」の聲がホテルの予約の際に聞けるようになりました。これは二つの町のお当やさんの配慮から、用意した食事が食べやすかったが、またどんなことに氣をつけたらよいのか等、受け入れが当たり前となっているからです。

さらに、祭りを通した大学と地域のプロジェクトとして図のような関係が確実なものとなっています。予算に関しても、関係図の
中の組織からの自助努力による捻出、または
県や協力団体からの支援等が少しずつ集まっ
て実施が可能となっています。このプロジェクト
に関わる人たちが祭りという目的を通して、
それぞれの役割を確認し関係性を大切にす
るといふ、地域創生を目指す教育的な効果
が互いに確認できているように思います。



とくしま異文化キャラバン隊とは？

そもそも、発端は、二〇一五年から三年間、徳島大学は文部科学省留学生交流拠点整備事業の委託を受け、「徳島の地域を舞台にして留学生に様々なイベントに参加してもらい、地域の文化と日本語を学ぶこと、またその体験を広報し発信すること」を企画したことです。その一方「外国人と触れ合う機会の少ない徳島の人たちに留学生との交流を通して、自分たちの日本語や文化習慣を外からの視点で見直してみること」を考えました。一つの活動から関わる人たちがそれぞれの学びを提供することをねらいとしています。その後、継続事業として特にこの日和佐の祭への参加は、二〇一八年の今も実施しています。この稿最初の皆様への問いかけは、昨年の十月に来日した留学生ら（中国・台湾・カナダ・スウェーデン・ベトナム・ナイジェリア・モンゴル等）が、実際に体験した内容です。徳島大学には約二五〇人、二六ヶ国からの留学生が在籍し、多くは修士以上の研究者、学部生、交換留学生（本学の協定大学からの半年から一年滞在する）です。この祭り以外にも様々な地域とのイベントがあり、二〇一七年度の実績は、全部で三四活動、キャラバン隊参加者はのべ四二四人です。

地理的な問題として、徳島県は、中央の山地のために西部と南部を容易に行き交うことができません。したがって、徳島市内に出でから、山の地域の西へ、または南の海の地域へ行くこととなります。キャラバン隊は、徳島大学を中心に西部と南部へ留学生が赴き、地域おこしとなるような国際交流活動を推進しています。関心のある方はどうぞ報告書を

ご覧下さい。（電子書籍となっています）
<https://www.isc.tokushima-u.ac.jp/app/wp-content/uploads/2018/03/b72bdac3ec1db4e663620e9c5329793f4.pdf>

むすびにかえて

この稿を目にしてくださいとされているときにはすでに六回目の参加を遂げていることと思います。今年は十月の六、七日に開催されます。総勢五七名、祭りへの参加男子は三四名の予定です。来年は是非この祭りの醍醐味と留学生らの奮闘を、美波町日和佐にて目の前で体験してみませんか。徳島は「阿波踊り」だけではありません、もちろん、ちようさを担いでくださったても、応援してくださいでもOKです。一緒に盛り上がりましょう！
そして今すぐ祭りを疑似体験してみたい方には、次の動画（十二分）をお勧めします。こちらには、祭りの概要と参加したスウェーデンと中国の学生のインタビューによる感想が収



められています。

一般財団法人地域活性化センター・日和佐八幡神社秋祭り第二一回ふるさとキラリ大賞
<https://www.youtube.com/watch?v=1ai8UldqzU>

さらに祭りの歴史から各町のちようさ比べを詳しく知りたい方には、

日和佐八幡神社の公式ホームページをご覧ください。
<https://hiwasahachiman.com/>

今回は、留学生による日和佐の祭体験をご紹介しました。実はこの後も留学生らには、災難が続きます。十二月には、県西部の美馬市の古い芝居小屋（脇町劇場オデオン座）にて、宮澤賢治のお話を上演したり、徳島名産の鳴門金時と他のサツマイモの、揚げる、蒸す、焼くの九種類の嗜好調査に参加したり、そして四国八八箇所のお遍路体験（もちろん一部です）をしたり、外国人の視点を活かした意見が求められる難行苦行がさらに続きます。



世界の学生